お正月

　毎年やってくるお正月。

「正月」は旧暦の１月の別称です。改暦されてからは、新暦の１月をいいます。元旦（1 月 1 日の朝）には「年神様」が各家に降臨して福徳を授けてくださると云われてきました。

年神様は、ご先祖様が百年、あるいは五十年後に神になるという祖霊神で、かつてはお盆と同じく先祖供養も行っていましたが、やがて分化して、新年のお祝いと新しい一年の無病息災を願うものになりました。年神様が降臨されるということで、敬意を表す「お」を付けて「お正月」と一般的には呼ばれています。

　旧暦のお正月の時期は、新暦では立春の頃になるので、年が改まるだけでなく、季節が冬から春に変わるという意味もあったと考えられます。

　新しい年神様を迎えるために、様々な行事があります。

　大掃除は大晦日までに終わらせます。神様は清浄を好まれます。

　しめ縄は、神様が降臨される神聖な場所という意味があります。掃除をして穢れを祓った場所に飾ります。神の領域と現世を隔てる結

界の意味もあるのです。

しめ縄の元は、古事記の「天の岩戸」に遡ります。

門松は、神様を家へ迎え入れるための依り代です。松と竹を組み合わせて製作されています。

「松は千歳を契り、竹は万歳を契る」と言われています。

　鏡餅は神様が鎮座なさる依り代であり、神の力が宿ると伝えられてきました。ゆえに鏡開きの一月十一日には、おさがりとしていただきます。大小の餅は月（陰）と太陽（陽）を表し、二つ重ねることで福徳が重なり縁起が良いと考えられてきました。また、陰陽が揃うことで、「和合」するという意味があります。

　年神様は、私たちに福徳だけでなく、魂も分けてくださると考えられています。魂というのは気力と言い換えることができます。つまり生きる力のことです。

お正月に、新たな魂を神様から一つ頂く。それが数え年の考え方の元です。

毎年お正月に、誰もが神様からひとつ魂を分けていただく。その魂の数を数えると年齢になるのです。

　お正月に「おめでとう」と言い合うのは、新年を迎えて、神様から新しい魂を分けてもらってめでたいとなるのです。

また、「おめでとう」と言い合うことは「呪う（まじなう）」というこ

ともあります。

「呪う（まじなう）」というのは、災いや難を避け、この先良い事がおこりますようにという思いを込めることです。

ある意味、お正月は「予祝」とも言えます

　お正月には飾りもの、料理など全て縁起の良いものを結集させます。

それは、昔の子供たちの遊びも同じです。

羽子板は音を鳴らすことで邪気を祓い、羽の黒い部分は「むくろじ」という植物の種から作られています。

「むくろじ」が「無患子」と漢字で書くことから子供が患わないという願いが込められているのです。

羽子板は「胡鬼板（こきいた）」とも言われており、厄除けのために豆を打ったことが始まりとの説もあります。

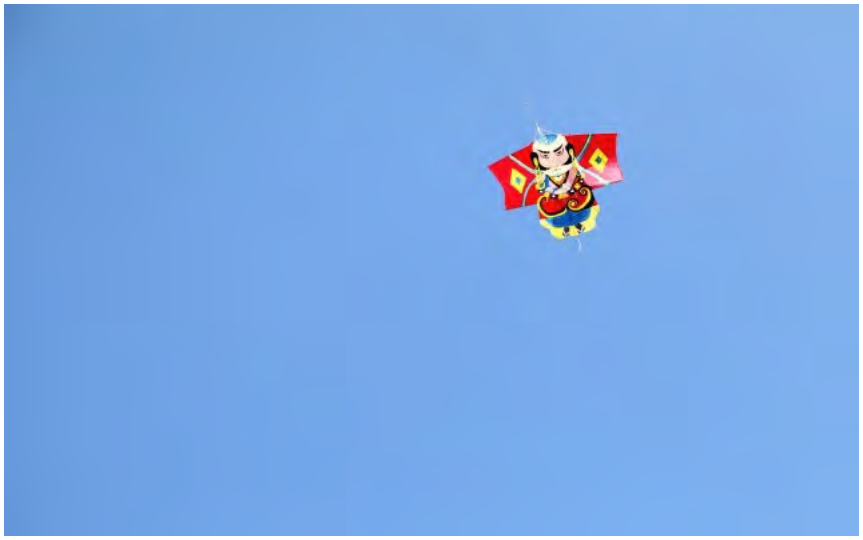
　今は少なくなりましたが、昔はお正月に子供たちが「凧あげ」をし

ていました。

作られている凧を買ってきて、さらにより高く昇るように、凧に足と言って、細長く裁断した紙を付けるという工夫をして、高く長く空に昇っている状態を維持するのを競った遊びです。大陸から入ってきたと言われているようですが、日本と大陸で同時発生的に作られたとも考えられています。

もともとは、戦の時の伝令道具として使われていたようです。

やがて、貴族の遊び道具となり、空高く上がるところに縁起の良さを感じて江戸時代では庶民の間でも流行りました。



　年齢を問わず、お正月に家族で楽しんできた遊びの中に「福笑い」があります。

目隠しをしておかめの顔を作っていくという遊びですが、目隠しをしているので、顔の造作、目、口などを置く位置がおかしくて、目隠しをとってみてから皆で笑います。

　この「笑う」ということが重要なのです。

「笑う門には福が来る」「笑わないと良い神が来ない」と言われてきたように、「笑う」は「祓う」にも通じ、邪気を払いのける力があります。

　お正月で一番大事なことは、「笑う」ことかもしれません。

年の初めに、家族、親戚、友人たちが集い、仲睦まじく笑うことで、昨年の様々な穢れ（気枯れ）を祓い、神様に一つ魂を分けていただき、新しい気力を宿して、感謝と共に幸多い一年となるよう祈り願う。

それがお正月の真の過ごし方ではないでしょうか。